
おおかみかくし ~The story of another world~

you

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おおかみかくし～The story of another

worlds

【ZINE】

N1888Y

【作者名】

yo

【あらすじ】

「じょうがまち
「姫娥町」

山間にあるその町には、大神様と呼ばれる神様が祀られていた。

これは、大神様とそれに関する者たちの、不思議なお話。

竜騎士07様作「おおかみかくし」の一次創作です。

それ系が嫌いな方、かなちゃんはこんな子じゃない！等、かなりのキャラ崩壊が予測されますので危ないと感じられたら、速やかに戻

るを押さないとおすすめします。

この作品を通して、おおかみかくしを知つて頂ける、プレイして頂けると嬉しく思います。

m () - () m

はい、突発性小説見切り発車症候群の影響です

おおかみかくしをプレイして、とある分岐がないことに『気がつきまして……。

じゃあ自分で創ればいいんじゃね？

ところの結論に達しました

なるべく原作の世界観を壊さない様にしたいのですが、どうしても
オリジナルが入るので、キャラ崩壊が予測されます。

生暖かい田で見守つてください。。。

違う。私が望んだのは、こんな世界じゃない。

真っ黒の空間。周りが全く目視出来ないほどの暗闇。
目を閉じて、ふわふわと浮かんでいるモノは、少女の声でそう感
いた。

この空間には、地面という概念が存在せず、浮かんでいるという
表現が正しいのかはわからないが。

ずっと……ずっと『彼等』を見守つてきた。私が望む世界を作
り上げてくれると信じて。

でも、もう……我慢できない。私はこんな事を望んではいなか
つた……！ なにせ、全てを終わらせる。それが、『彼等』を生み
出した私の責任。

そのモノは、両手を重ね、田の前を揃うように、ゆっくりと持ち
上げる。その手の中に、微かに光る欠片が現れた。

刻は満ちた。赤く輝く月と共に。足りない力は大地から少し借
りたために、今年の八朔は不作になるでしょうけど……『彼等』を
滅ぼすのであれば、もう関係のない事ね。

少しずつ、欠片の光量が増していく。

ゆっくりと目を開けて、呟つ。

たあ、終わらせまじょう。全てを。

両手から閃光が走り、その姿はかき消えた。

Prologue(後書き)

わかる人にしかわからない！

な、なるべく始めての方でも分かりやすいように書いていきたいです。
。。。

始まりの朝（前書き）

しばらく説明が続く予感……。

始まりの朝

「ううー、今何時だ……？」

朦朧とした意識の中、枕元に置いた目覚ましを、手探りで探す。目覚ましの形は、かなりオーデソックスなタイプで、二つの鐘のが

ついているものだ。その鐘の片方に指が触れる。

た。

「つまえ……、まだ起きるまで30分もあんのかよ。もうひと眠り

U

ポロリと、俺の手元は嫌だと言わんばかりに、田覚ましが逃げ出し、自由落下を始める。

それは端から見れば一瞬の出来事。

しかし俺には、スローモーションで迫ってきてくる田舎まじかにも、数分にも感じ

ゴッ！！

見事に、鐘の部分にヘッドバットをかまされた。

「？」！？！？」

本気で痛いときは、声が出せないって言つたが、あれはマジだと

体感した。

悶絶する俺。気が付けば、土下座をするような格好でおでこを押

さえていた。

「「おおお……死ぬるう……」

時間と共に痛みがマシになり、その分、言い様のない怒りが沸き上がつてくる。そして、その矛先は当然、目覚ましへと向かう。

「つたいわぼけえつ！」

それを掴み、放り投げる。わりと全力で。勢いよく飛んでいった目覚ましは、机に当たり、ガシャンと音をたてて碎ける。

「　はっ！？　し、しまつたあああつ！」

だが、時すでに遅し。

目覚ましを慌てて拾いに走るが、それは只の鐘がついた物体へと成り果てていた。

「「うう、最悪だ……」

一人暮らしの俺にとつて、目覚ましの重要度はかなりのものだ。あれがなければ、俺は一瞬で社会的信用を失うだろう。

……まあようするに、遅刻確定だと言つことだ。

時計がない状態で、今から一度寝などをしてしまえば……。

転校初日から、教師に目をつけられる可能性があるのは、さすがにいただけない。

俺は渋々、こんな早朝から、学校に向かう準備をするのだった。

俺の名前は九十九優理。 じゃない高校生だ。 容姿は中の上くらいだろうと思う。

両親は、もういない。 高校に入学してすぐぐりごとに事故で亡くなり、 親戚の家に引き取られた。 だが、親戚の魂胆は最初からわかつていた。

遺産。

高校生にもなれば、 それくらいの事は感じ取れる。 だから俺は、 一人暮らしのできる所を探していた。 親戚の手を借りず、 一人で生きていくために。

そんな折、 まさにうつうつけの話が飛び込んできた。

都心から離れた山間にある町、 嫦娥町。

ここでは昨今、 都市開発が進められており、 今なお人口は増え続けている。

そんな情勢もあってか、 1Kのアパートが、 風呂・トイレ別であるにも関わらず、 家賃二万円という破格の値段で、 入居者を募集している、 と。

もちろん俺は、 即電話をかけ、 大家さんに家庭の事情を話すと、 快く入居を許してくれた。

親戚には、 遺産の半分を譲ることで無理矢理納得させ、 嫦娥町にある高校に転入手続きをさせた。

じつして俺は、 晴れてこの嫦娥町に引っ越して来ることが出来た

の
だ
つ
た。

始まりの朝（後書き）

さて、次からメインヒロイン達の登場……！？

転校生（前書き）

脳内プロジェクトに基づいて書いております。つい、またの如きを思つておるとも言つておます。

そ、そんな田で見なにでーー？（泣）

転校生

学校に行く準備をすませ、俺は時間潰しのためにテレビを見ていた。

『今年の夏は例年に比べ、気象の変化が激しく、八朔の生産量が大幅に減少しているため、姫娥町では』

朝のニュースで、キャスターさんがこの町のことを中心配している。そういえばこの辺りは、八朔の木がかなり大量に見受けられる。この町の特産品か何かなのだろうか。

そんな事を考えていると、ちょうどいい時間になっていたので、俺はテレビを消して、学校へ向かうことにした。

「えーっと、この角を曲がれば……お、見えた見えた

手書きの地図とこらめっこしながら角を曲がると、正面に学校が見えた。

何を隠そう、俺は方向音痴だ。そのため、前日に学校までの道程を下調べし、地図を書いておいたのだが……都會暮らしに慣れていった俺は、地図があるのにも関わらず、軽く迷ってしまった。

「はあ……、どうにかならんもんかねえ、この方向音痴は

愚痴をこぼしながら、正門に向かって歩いていく。

「見るのは一回田だけ……」のいびつな校舎は慣れないな」

この『私立嫦娥高等学校』は、かなり昔からある学校らしい。近年の人口増加に伴い、突貫で増築を繰り返したため、校舎がかなりデコボコしているのだ。と、転入手続きの際、校長先生に聞かされた。

「おおい！ 九十九！ こっちだこっち！」

声をかけられ、ふと周りを見渡すと、ムキムキマッチョな男性が立っていた。

「あ、鷺羽先生。おはようござこます」

「なんだなんだ！ 朝から元気がないぞ九十九！ もつと元気よくあいさつしないか！」

言いながら、バシバシと肩を叩かれ

「つて、痛い！ 痛いですよ先生！？ どんだけ力入れてるんですか！？」

「はつはつはつは！ 男ならこれくらい耐えて見せろー。」

この妙に暑苦しい人は、『鷺羽美幸』先生。

女性の様な名前だが、見た目はいかついまッチョのむつきむき君である。

手続きの際、この名前を見て、『女の先生かあ、可愛い人だといいな』なんて妄想していた分、紹介された時の落胆具合は半端で

はなかつた。正直、詐欺だと思つわけですよ、はい。

「んん？ どうした九十九？ 変な顔して」

これからクラスの皆さんに紹介すると言われ、ついていつている最中に声をかけられた。

「い、いえ。なんでもないですよ？ あ、あはは……」

先生の悪口を思つてましたなど、口が裂けても言えない。口にしたが最後、先生のぶつとい腕による熱い包容（またの名をヘッドロック）により、即刻、天に召されるだらう。それはもう廿紀末霸者の如く。

「我が生涯に一片の悔いな……いやいやいや一 むしろ悔いしかないし！？」

「？？？ 何をぶつぶつ言つてるんだ九十九？ ほら、もう教室に着くぞ？」

どうやら少しトリップしている間に、教室に着いたようだ。

「じゃあ九十九、先生が先に入つて説明するから、呼んだら教室に入つてくれ」

「はい、わかりました」

先生を見送つてしまはらくすると、中から俺を呼ぶ声がした。

「よしつー 行くか！」

深呼吸して少し気を落ちさせ、緊張しながらも俺は教室のドアに手をかけた。

俺が教室に入ると同時に、ドオッ！ と、爆発的な歓声が巻き起こる。

「な、なんだこれ……？」

これが女の子だけの黄色い悲鳴なら嬉しさが勝つたのだろうが、男女関係なく黄色い悲鳴をあげられると、嬉しさよりも呆けてしまう。

悲鳴をあげているのはクラスの半分くらいで、もう半分はその悲鳴に驚いたり、またかといったような呆れ顔をしている者と、様々だ。

だが、一人だけ、青ざめた顔でこちらを見ている女の子がいた。絹地の様にサラサラとした長い髪。百人が百人、美女だと答えるであろうその子は、こちらを見つめて固まっていた。

な、なんだろ……。俺、あんな美人さんに何かしたつけ……？いやいや、そんな筈はない。だって、あんな綺麗な人は今まで一度も見たことないし……。

「九十九、自己紹介！」

「あ、は、はい！」

先生に急かされ、簡単に自己紹介をすませる。

「九十九優理です、皆さんよろしくお願ひしますー。」

そしてまた歓声が爆発する。俺は何がなんだかわからないまま、促された席に座った。

「????」

頭の中が疑問符だらけのまま、淡々と授業は始まつていった。

「つ、疲れた……」

昼休み。俺は机に突っ伏していた。

最初の授業が終わり、休み時間に入ると、俺は即座に取り囲まれた。その後は、完全に質問攻めである。やれ、どこから来たのかだの、趣味は何だの、好きです付き合つてくださいだの、そんなやつより俺と突き合おうぜだの、それはさながらマシンガンの如く質問をぶつけられた。

それを、毎時間、授業が終わる度に、である。これで疲れない方がおかしい。

今はお昼、皆ご飯を食べなければいけないとこじりついで、ようやく嵐のような時間が過ぎ去ったのだ。

ふいに、コトンと机に何かを置く音がした。顔を上げると、机には缶コーヒーが置いてあり、机の隣には眼鏡をかけた男子が立っていた。

「お疲れ様、大丈夫？僕も転校初日はそんな感じだったから、気持ちはよくわかるよ」

隣の席にストンと座りながら、声をかけてくる。

「ありがと。えーと……」

「あ、ごめんごめん！自己紹介がまだだったね。僕は九澄博士、九十九君と同じ転校生なんだ」

「九澄君も転校生なの？」

「うふ、僕も五日前くらいに転校してきたばかりなんだ」

「五日前！？ めちゃくちゃ最近じゃん！？」

「そうなんだ、と、頭をかきながら照れている様な感じで言う九澄君。

「席も隣同士だし、名字もなんだか似てるし、もしかしたら仲良くなるかなって思つて」

「いらっしゃい、仲良くして貰ると嬉しいよー。なんかあんなに困まれると萎縮しちゃうってさ？ すごい話し掛けにくかつたんだよね」

「あははー。その気持ちよくわかるよー。あ、僕の事は博士って呼んでくれていいよー」

「ん、わかった！ じゃあ俺の事も優理つて呼んでくれない？」

「もちろんー！」

意気投合し、じばらく談笑していると、バンッ！ と、教室のドアが開き、一人の女の子が九澄君に勢いよく飛び付いてきた。

「ヒロくん… やつと見つけたあ… んもう… ボクを置いてつらやうなんてビド… よお…！」

女の子は、黙つや否や、博士の腕に抱き付く。

「い、五十鈴ちゃん…？ 優理が田の前にいるんだからそんなにくつつかないで… 誤解されちゃつよ…？」

「あひあひあひ…、お一人はこつもんぶらぶらじゃないですかあ…」

「ちよつ…？ かなめさんまで誤解されるよつな」と言わないで…？

「誤解もなにも、ボクはヒロくんのことが好きなんだもん… 全然問題ないよ？」

「い、いいい、五十鈴ちゃん…？」

何故か田の前で、ドタバタラブコメが始まり、どうしていいのかわからなくなる。

「すいません、優理くん。お騒がせしてしまつて」

「あ、いえいえ。楽しつつで何よりですか…？」

ペコリと頭を下げるもつ一人の女の子にひれで、思わず「ひらりも頭を下げる。

おつとつとした可愛い人だな、といつ印象をつける女の子だ。黒く長い髪の毛は、両肩の辺りで二つに纏められ、胸に流れている

「ふふつ　　ハカセくんとすずちゃんはいつもこんな感じなので、早めに慣れておいたほうがいいですよ?」

「そ、そつなんだ……?」

「ええ、そつなんです。あ、私は朝霧かなめ(あさぎりかなめ)といいます。向こうでハカセくんにくつついているのは、すずちゃんです」

朝霧さんに教えられ、そちらに田を向けると、九澄君にくつつきながら、女の子が手を振つている。

「初めまして!　ボクは摘花五十鈴!　五十鈴つて呼んでね!　ユウくん!」

「え、あ、うん。よろしく……ね?」

ショートカットで、元気いっぽいな女の子にあこがれを返す。いわずもがな、美人である。野性味溢れるその魅力は、朝霧さんとはまた違つた可愛さがある。

「朝霧さん、いつも博士と摘花さ　　五十鈴さんはこんな感じなの?」

横から五十鈴だよ!　と、釘をとされ、慌てて訂正しながら、質問する。

「ふふふ、かなめでいいですよ。ハカセくんのお友達なんですから、私のお友達つてことにもなりますし。そうですね、いつもからぶらぶら、羨ましい限りです」

「かなめさんっ！ 九十九君にあることないこと吹き込まないで！？」

大変そうだな……、博士。

「んん？ ユウくんもなんだかヒロくんと同じ匂いがする……。でもでも、ヒロくんへのボクの愛情は変わらないんだからねー！」

「わわっ！？ 五十鈴さん！？ 近い近い！？」

いつの間にかこちらに移動してきた五十鈴さん。その距離が異常に近く、素で焦る俺。

そして、言うだけ言つて、ぷいとそっぽを向く五十鈴さん。

「あらあら、嫌われてしましましたねえ、優理くん

「ええっ！？俺のせいなの！？」

あははと笑う三人を、俺は唇をとがらせ、うらめしげに見る。しばらぐすると、昼休み終了の予鈴が鳴り、皆それぞれの机に戻つていった。

とは言つても、皆席が近いので、ほとんど変わつてはいないが。唯一、五十鈴さんだけが、次の授業の先生に注意されるまで、博士にくつついていたのはじ愛嬌である。

もしかしたら、今までの休み時間より疲れたかも……。

だけど、知らない他人から受けたる疲労より、友達から受けたる疲労は嫌いじゃないな。などと思いながら、俺は自然とこぼれる笑みと共に、午後の授業を受けるのだった。

「優理くん、ニヤニヤして、気持ち悪いですよっ。」

「かなめさんヒドくない！？」

転校生（後書き）

さういぢょりへ、キャラおかしくないですか？
（（（・。・（（（

長い……ですかね？

授業の終わりのチャイムと共に、俺は再度、机に突っ伏した。学校でこんなに疲れる場所だつて……？

「ヒロくんー かなちゃんー コウくんー 一緒に帰るー。」

五十鈴が博士に向かってきながら、声をかけてきた。

「うそ、帰るのか。田覚まじのこと、よむじへな？五十鈴のを探してあげるよー。」

「ひひひ……、そのことを掘り返せなこでくれよ。……」

「あはは、でもびっくりだよね。優理がそんなことするふうには見えないけどなあ」

「優理くんは、意外とおしゃべさんなんですねえ

博士に続いて、かなめちゃんが頷く。

昼休みの後の休み時間も、この四人で集まって話していたので、今ではかなりフランクな感じで呼びあつていてる。

その休み時間で、今朝田覚ましを壊してしまった事を口にすると、皆が買い物に付き合つてくれると言うので、お言葉に甘えることとしたのだ。

ちなみに、この時に博士がかなめちゃんを、『ハカセ』と呼ばれていた理由を知った。読んで字の「」と「」と「」と「」。『』は

かせ』と漢字で書いて『ひろし』だもんなん、そりやあだ名がハセにもなるわな。まあ俺はもうすでに博士と呼んでいたので、そのまま博士と呼び続けることにした。

こんなに短い時間で、よくここまで打ち解けたものだと、自分でも感心する。

「九十九君、九澄君、私達とも一緒に帰りますー。」

「九十九！ 九澄！ 遊びに行こうー。歓迎会しようぜー。」

とまあ、こんな感じで、クラスメイト達からも、かなりよくしてもらっている。

「『』めん、今日は用事があるから、また今度なー。」

クラスメイト達の誘いを断つて、かなめちゃん達に向き直る。

「そ、行こうか。案内よろしくー。」

にっこり笑って話しかけると、三人が固まる。

……何故？

「優理つて、どれだけ爽やか好青年なのぞ。男の僕でもドキッしてたよ」

「あら？ ハカセくん、もしかしてそっちの氣があるのかしら」

「ヒロくんヒドいー。ボクといつものがありながらー。」

「俺はそっちの氣はないぞー！？ 丁重にお断りするー。」

「かなめさん！？ そつちの氣つて何！？ 五十鈴ちゃんも優理も、真に受けないでよー ってか、五十鈴ちゃんはなんか、言つてることがちよつとズレてるしー？」

ほんわかした空氣に包まれ、俺達は、四人で笑いながら（博士は一人むくれているが）、教室を後にしたのだった。

「でもさ、なんか凄い歓迎つぱりじやない？ 転校生つてそんなに珍しくもないでしょ？」

「うん、僕もそう思つ。あそこまでチヤホヤされると、戸惑つちゃうよね」

田覚ましを買いに行く道すがら、俺に対する熱烈歓迎つぱりに対する疑問を出すると、博士も、うんうんと同意してくれる。

「確かにそうですね、優理くんは爽やかイケメンなので、まだわからぬでもないんですけど、容姿も並、性格も普通、とりわけ良いところもなさそうなハカセくんまで、あの人気、というのは、いささか疑問ですねえ」

「か、かなめさんつて時々、心にグサグサナイフを突き立ててくるよね……」

かなめちゃんの刺のある言葉に、田に見えて落ち込む博士。

「が、がんばれ博士！ 良いところの一つや二つ、ありますわー。た、多分……。などと、心の中でホールを送つてみる俺」

「優理……、声出でるよ……？」

「え？ で、出てた？ あ、あははは……『じめん』『じめん』

博士はさらに落ち込み、頭を頃垂れでいる。なんか黒いオーラが見える気がする……。かなり足取りも遅くなっているようだ。いつ、地面にめり込んでおかしくなさそうだなこりや……。

「大丈夫だよ、ヒロくん！ 良いところなんか一つもなくとも、ボクはヒロくさんのことが大好きだよー！？」

「五十鈴ちゃん……、それ……、フォローになつてない……」

五十鈴があたふたしながら博士に声をかけるが、完全に逆効果のようだ。博士が蚊の泣くような声で返事をするさまを見れば、一目瞭然である。

そんな様子を、かなめちゃんは、二口二口しながら傍観している。確か、言い出したのはかなめちゃんだったよな……？ 結構かなめちゃんつて、腹黒

「優理くん？ 今何か失礼なことを考えませんでしたか？」

「いー？ いえいえ！ 滅相も『わいませんー』

「そうですか？ それならばいいのですが……。もし変なことを考えていたら……ねえ？」

「やつ、そそそ、そんなわけないじゃない『スカ！ あは！ あははははー！』

「」「怖つー？」

満面の笑みではあるのだが、重圧が半端ではない。といつより、笑顔だからこそ、怖いのだらつ。

「ユウくん……かなめちゃんは怒らせちゃダメだよ？ あの顔で怒られるんだから……。ボクは死ぬかと思ったよ……」

五十鈴がこつそりと耳打ちしてくれる。なんでも昔、かなめちゃんを怒らせてしまったことがあるらしい。笑顔で淡々と説教されたらしい。

「わ、わかった。気を付けるよ……」

怒鳴られて怒られるより、満面の笑みを浮かべて怒られる方が、より恐怖心を煽るだらつ。俺は生睡をゴクリと飲み干しながら、そう答えた。

「ヒヒヒ、ヒヒヒでさ。何処に田覚ましを買いに行くの？」

「場の空気を変えようと、必死に話題をそらす。

「姫中だよー？ あそこに行けば、なんでも揃っちゃうんだからー！」

「すずちゃん、アバウトすぎますよ。優理くん、姫中といつのは、姫中央マーケットの略称で、大きな商店街の様なものです。本当にこんなお店がありますから、きっと気に入った田覚ましが見つ

かると思こますよ?「

なるほど、確かに商店街なら、なんでも揃つといつのはあながち間違いではないだら?」

ちなみに、ボーリング場などの、遊ぶ場所も充実しているため、かなり人気のスポットのようだ。

「まあ説明は出来ても、案内をしろ」と言われたら難しいんですけどね? 私も、高校に入る前にこちに引っ越ししてきていたので、何処に何があるかまでは、完全に把握しきれていないので」

「え? かなめちゃんも、姫娥町出身じゃなかつたんだ?」

「はい。ですから、詳しいことはすずめに聞いてくださいね?」

「はいはーー! 姫娥町のことなら、ボクになんでも聞いてねえ~」

「

「でも、一つだけ気を付けなきゃいけないことがあるんだ」
「うん? ひとつだけ気を付けなきゃいけないことがあるんだ?」
「気を付けなきゃいけない」と……?」

「うん、姫中にあるお店は、六時になるとほとんどが閉店準備を始
オウム返しに聞きなおす俺。

めるんだ。七時には完全に閉まっちゃうよ？ 十時には、出歩いてる人なんか全然いなくなるしね。 いふとすれば、不審者か、夜回り番の人くらいかな」

非行防止も兼ねてるみたい。五十鈴ちゃんの受け売りだけね。
と、博士が続ける。

「七時！？ マジで！？ 早すぎない！？」

「だよね、僕もそう思つよ。早めに買い物すませないと、ご飯も食べれないからね」

そうなのだ。俺は一人暮らしの為に、自炊もしくは外食をしなければならない。自炊は出来ることは出来るのだが、いかんせん、面倒くさが勝つてしまつ為、今日は外食かお惣菜を買って済まそうと思っていたのだ。

「うああ、ついでに今田の『』飯も買つておかなきやだな……」

「? ? ?
優理くんのお母さんは、今日家には帰らないんですね?」

「あ、俺一人暮らしなんだ。両親は一人とも他界しちゃつてさ？親戚が引き取つてくれたんだけど、ちょっと『こたつ』たしちゃつてね。それで、この嫦娥町に一人で越してきたワケ。一人立ち出来る、ち
ょうどいい機会だしね」

「そ、 そ う な ん で す か 。。。」 めんなさい、 失 言 で し た 。。。」

かなめかやんが本当に申し訳なさそうに頭を深く下げる。

とたんに、空気が重くなる。あちゃー、俺の方が失言だったかも。両親が亡くなつて、こんな場面には何度か遭遇したが、正直大嫌いな空氣だ。

払拭せるために、慌てて言葉を取り繕つ。

「いやいやいやー、そんなかしこまらないでいいよー、もつ慣れちやつてるし、気にしないからー！」

いや……、でも……と、うじうじしだすかなめちゃん。
それなら俺にも考えがある。

「じゃあ、かなめちゃん。悪いと思つてるなら、家にご飯作りに来てよ、なんなら同棲してくれると助かるなあー」

「あ、あらあら、付き合つてもいらないのに同棲なんて……、優理くんはけだものさんだつたんですね……」

そう言つて、かなめちゃんはぱいと向いひつを向いてしまつた。

「優理ー!? 突然何言つ出すのー?」

吹き出しながら、叫ぶ博士。

「か、かなめちゃんにそこまで言える人、ボク始めてみたよ……。ユウくんつて意外と大胆なんだね……」

五十鈴は、驚きと感心が混ざつたような顔をしている。

まあ何はともあれ、目論み成功！ 今までの暗い雰囲気から打つて変わって、明るい空気が戻ってきた。

でも、そっぽを向く前のかなめちゃんの顔が赤かつた気がしたん

だよなあ。気のせいかな……？

田原おじを買ひ終わつ、惣菜を買つたためにスーパーに行ひつとこでこると、博士がこう切り出した。もし優理がよかつたら、今田家で「飯食べない？」と。

「そりや、臺んで行きたいけど……迷惑じやない？」「家族とかにやれ~。」

「そんなことないよ！ むしろ家の妹が迷惑かけるかもしれないぐらいだし」

「え？ 博士って兄妹居たんだ？」

驚きの声をあげる俺。

いやあ、意外。てっきり一人っ子だと思つてたもんなあ。

「マナちゃんひいてのーーとお~つても可愛いくて、優しいんだよー。」

「そんなことないよ？ 五十鈴ちゃんの前ではそつ振る舞つてるかもしれないけど、家の中じや酷いんだから……」

「ハカセぐる？ 妹さんの悪口は良くないですよ~。」

「う~。そうだね、『めぐ』

「うそうそ、素直に謝れるのほいい事だよ、博士。なんだ、良いと
いうあるじやん。

「まあとにかく、ほんとにお邪魔でないなら、お母さんおせわせてもう
おつかな」

「あつらん！ 大歓迎だよ！」

「ええー！？ ノウくんずるーー！ ボクもヒロくん家で！」飯食べ
たいよう～！」

「ダメですよ、すずちゃん、邪魔をしちゃ。ハカセくんは、そういう
体で優理くんをお持ち帰つしよつとしてこぬのですから」

「なつ……ー？ そつだつたのか博士ー。お前つて奴は……ー」

「えええー？ ダメだよヒロくん！ ノウくんをお持ち帰りする
くらいなら、ボクをお持ち帰りしてよつー」

「だからかなめさんー？ 違うつて学校でも書つたドシヨーー？ 優
理もわかつて悪ノリしないでよー。後、五十鈴ちゃんはやつぱり
ズレてるからねーー？」

そしてやつぱり、四人で笑いあうのだった。（無論、博士はむく
れていたが）

姫中（後書き）

元ネタを知ってる人は、この話で何故作者が一次創作を書きたくな
つたかがわかるハズ。。。

九澄家での一時（前書き）

ライブに行つたわけでもないのに、首がむちむち……。
皆様もカラオケでのハツチャケ過ぎには、注意を

九澄家での一時

八朔の木が生い茂る中を、俺達三人は歩いていた。
婦中で買い物を済ませたあと、かなめちゃんは家の方向が違うといつことなので、途中で別れ、今は博士と五十鈴に着いて行つている状況だ。

「そういえば、この町に来てずっと不思議に思つてたんだけど、八朔の木がやたら多いのはなんでなんだ？」

「あれえ？ ユウくん知らなかつたの？ 婦娥町は八朔の名産地なんだよお？ はっせくはっせく、婦娥の八朔う～ つて歌つてのCM見たことない？」

五十鈴の言葉に、そんなCMをテレビで見た気がするのを思い出した。狼の着ぐるみが踊つていて、かなりシユールな光景だつた気がするが。

「なるほどねえ、だからニュースで、八朔の事を心配してたのか

「そりなんだよお、今年は八朔の数が少ないから、八朔祭りがちゃんと出来るかどうか心配なんだあ……」

「「八朔祭り？」」

俺と博士が、全く同時に疑問の声をあげる。

「そり、ヒロくんも初めてなんだつけ。じゃあボクが説明してあげるよー！」

そう言つて、五十鈴は八朔祭りについて、説明してくれた。

要約すると、八朔祭りとは、嫦娥の町に古くから伝わる祭りで、
大神様おおかみさまと呼ばれる神様に、豊作祈願と収穫のお礼を捧げる祭事だと
いつ。

嫦娥町は娯楽が少ない為、町中の人がこの祭りをかなり楽しみ
にしているらしい。

メインの催しとして、『願い事を書いた紙を差し込んだ八朔を、
坂道や階段などから転がして捨てる』というものがある。

拾った八朔に書かれている願い事は、その八朔を拾った人に叶う
のだという。

その為、皆必死に八朔を拾う。野球のキャッチャーばかりを集め
たチームを結成する人や、八朔を捨てる用のロボットを開発する人ま
でいるらしい。……どんだけだよ。

「そんなワケで、八朔祭りは嫦娥の人達にとって、一大イベントな
んだよ！」

「へえー、そんなに熱く語られると、俺もわくわくしてくるなあ」

「でしょでしょー！？ 出店も美味しいものがたくさんあるんだあ

「五十鈴ちゃん、よだれよだれ」

「あわわわっ！？」

じゅるりとよだれをたらす五十鈴。博士に指摘され、慌てて口元
を「口シ」「口シ」と拭う。

そんなこんなで歩いていると、一人は団地に入つて行つた。

……ん?

「なあ博士。今博士の家に向かつて歩いてるんだよな?」

「ん? うん、そうだよ?」

「五十鈴も家に帰つてるんだよな?」

「何言つてんの口かくん。そんなの当たり前じゃん」

「つて」とは……まさか。

「もしかして、一人ともこの団地に住んでるのか……?」

「「やうだよ?」」

キレイにハモつて、返事が帰つてくる。

「あー、まあ……その、なんだ。頑張れよ、博士」

「え? 何が……あ、ああ。やつこつ」とか

ちりつと五十鈴を見て、苦笑いを浮かべつつも、納得する博士。

「ちよっと口かへる。それどおりの意味なのー? ヒロへるも何に納得してゐるのー?」

「ふつりと類を膨らませ、ふりふり怒る五十鈴。姿は可愛らしきのだが、どうやらちよつと本氣で怒っているようだ。

なんとかしてくれ、と、博士にアイコンタクトを送る。

「「めぐめん、明日アイスクリーム奢るからやー。機嫌直してよ、五十鈴ちやん」

「えつー? アイスクリーム! ? わあーい 約束だからねヒロくん! 」

「じゃあ明日に備えて早く寝るねー。おやすみーと、五十鈴は、叫びながら走り去った。

な、なんて変わり身の早さだ……。

「ありがとな、博士。助かった」

「これべらべらのことなこよ。かなめりこひ、『すずちやんは物で釣れ』つていうアドバイスを聞いてなかつたら危なかつたけどね」

類を人差し指でポリポリ搔きながら叫ぶ博士。こつやかなめりこんにも感謝とかなきやだな。

「そ、僕らも帰らつか。もう家もすぐそこだし」

「うん、」駆走になります

そして俺達も家に向かつて歩き出した。

「ただいまー」

「お帰りー 遅おーーー 今日はお兄ちゃんが当番なんだから、早く飯作つ……て……」

奥から車椅子に乗った女の子が、かなり機嫌悪そうに立って奥へ来て、俺の顔を見た途端に固まる。
なんだか、デジヤヴュを感じる……。
と、とりあえず、挨拶しておいた。

「こんばんわ、君がマナちゃんかな？ 突然お家に来りやつて」めんね？ 驚かせちゃつたかな？」

俺は、たぶんこの子が博士の妹、マナちゃんなのだと予測し、声をかける。

ロングの黒髪をストレートに伸ばし、まだあじけなさの残る顔には似合わず、どこか大人びた雰囲気を持つている女の子だ。五十歳が可愛いというのも納得である。

「え、あ、えと。こんばんわ！ ちょっと失礼しますー お兄ちゃんー ちょっとーーー」

「いやいや、博士の手をとつて、奥に引っ張つむマナちゃん。
器用に車椅子を扱つねに、思わず感心してしまつ。

「お兄ちゃんー あのかつーーー人なんなのーーー？」

「なにって……、今日転校してきた、九十九優理君だよ」

「マナじゃなくて……なんで一緒に帰ってきたのって聞いてるの……！」

「ああ、今日一緒に晩ごはん食べる約束したからね、家に招待したんだよ」

「ええ！？ それならそつだつて連絡入れてよー！」

あたしだつて準備があるので……と、ブツブツ言つマナちゃん。 といふか、小声では話しているのだが、丸聞こえである。なんだか家にあがりにくい雰囲気だ。

「えーと……、また今度にしようつか？」

「……あ、全然大丈夫です！ あがつてゆつくりしててください！」

声をかけると、マナちゃんが中に入るよう促してくれた。

「お兄ちゃん、早くあがつてもらこなよ！ 九十九さん待たせちゃ悪いじゃないー！」

「マナが引つ張つてきたせいじゃないか」

「何か言つたー！？」

「な、なんでもないよ……。優理、とつあえずあがつて？」

大丈夫なのだろうか……。俺はおしゃるおしゃる、靴を脱いで、お邪魔しますと家にはいる。

「お兄ちゃん、あたしあつと部屋に行つてくるから」

「ん、わかった。じゃあ」飯出来たら呼びに行くよ」

「いいよ、すぐ出でてくるから。九十九さん、」*やあへつぱん*「

「ありがと」

につこり笑つて返すと、マナちゃんは顔を赤くして、いそいそと部屋に入つていつた。

「……優理つて、天然の爆弾だよね」

「なんだよそれ……？」

「わかつてないから、余計にたちが悪いしね」

からから笑う博士。じつにひとつなんだ……。わけがわからん。

「じゃあ」飯作るかい、テレビでも見ながら待つてよ」

「博士が作るのか？ そつこえは、親御さんを見かけないけど……、もしかして博士も……？」

「いや、確かに母さんは西ないけど、父さんは部屋にこると西つわ？ つて言つても、母さんは別居中つてだけで」

「べつ……ー？ 悪い、野暮なこと聞いたな

「あはは、気にしないで？ ほんとこの父の父さん甲斐性ないからねえ」

「へ、そつか。あ、『飯作るなら手伝ひな？』

流れを変えるために、手伝いを申し出る。俺がこの空氣を嫌いなよつこ、博士もあまり好きではなさそうに見えたからだ。

「ええ！？ いこよ！ お密さんなんだからゆづくつしてて？」

「さすがに気が引けるよ。俺も一人暮らしで料理作ったりするから、腕をあげときたいってのもあるしな？ サボつてると腕が落ちるんだよ」

博士は渋つていたが、俺のためにもなると説得すると、手伝いを了承してくれた。

今日はカレーにするところだったので、俺はジャガイモの皮を剥きにかかった。

「九十九さんつて料理もできるんですね……？」

するするジャガイモの皮を剥き、適当な大きさに切つていると、いつの間に部屋を出てきたのか、マナちゃんが俺の手つきを観察していた。

「あ、あたし九澄マナ（べすみまな）って言こます。お兄ちゃんがお世話になつてます」

マナちゃんは先程とは違う服装で、可愛らしい、大きな白い帽子をかぶっていた。

「九十九優理だよ、よろしくね？ マナちゃん。まあ、俺って一人暮らしだからね、多少の料理スキルがないとマズイんだよ」

「九十九さん一人暮らしなんですか！？」

「まあね？ とは言つても、なんでもできるわけじゃないけどね」

「いえいえ、その時点で、お兄ちゃんとは天と地の差がありますよ！」

「……マナ。料理の邪魔しないでくれる？」

「別に邪魔してないもん」

兄妹の目から、火花がバチバチ出ているのが見える気がする……。

「僕は優理に迷惑かけないでって言つてるのー！」

「………… 九十九さん、あたし迷惑ですか…………？」

「え？ いや、そんなことないよ？」

「ほらお兄ちゃん！ 九十九さんだって迷惑じゃないって言つてるじゃん！」

「優理が気を使つてくれてるだけだよー！」

まさに一触即発。危うい空気がふんふんしている。ちなみにカレーは、博士が言い合いで夢中になつていたため、俺がたんたんと作つていてる。もうルーも入れ終わつたし、後は煮込むだけだな。ついでにポテトサラダでも作つとくか。

鍋を火にかけ、茹で上がつたジャガイモを潰し、薄切りにしたきゅうりと玉ねぎを入れ、マヨネーズと塩コショウで味をつけて……と、完成 サラダを作つている間にカレーも煮込み終わつたみたいだ。

「なによー」

「なんだよー」

料理を作りながら放置していれば、喧嘩も終わるだらうと思つていたのだが、逆にヒートアップさせてしまつただけのようだ。

どうしたもんかと頭を悩ませていると、奥の部屋がガチャリと開き、髪の毛がボサボサの、無精髭を生やした男性が歩いてきた。

「んー、いい匂いだ。今夜はカレーかい？ つと……君は……？」

「えと、お邪魔します。博士君のクラスメイトで、九十九優理と言います。今日は博士君に夕食に誘つていただいたので……。ご迷惑おかけします」

「ああ、博士の同級生かい？ いやいや、いつでも遊びに来てくれて構わないよ。博士も引っ越してきたばかりで、友達も少ないのでうから、仲良くしてやってくれないかい？」

「はーー。もちろんですー！」

「僕は九澄正明、博士と……マナはもう知ってるかな？ 一人の父親をやらせてもらつてるよ」

喧嘩中の一人をちらりと見て、苦笑いを浮かべながら自己紹介をされる。

「ほり、博士、マナ。いつまでやつてるんだ。お客様さんに失礼だろう」

「一人とも、」飯出来たし、早く食べよう？

博士とマナちゃんは、正明さん、次いで俺、最後にカレーの鍋を見るとばつが悪そうに席に座つた。

俺はそのまま、四人分のカレーを盛る。

これじゃ、どっちが九澄家の人に間かわからないなど、心の中で苦笑する。

「はい、どうぞ。召し上がりー」

「「「いただきます」」

三人が一斉に食べ始める。

正明さんが、学校はどうだった？ とか、当たり障りのない話を口にしている。

そういえば、大勢で食事するのも久しぶりだなどと、俺は一人ごちる。

「ごめんね、優理。来てもらつたのに料理作らしちゃつて……」

「ん？ 気にすんなつて。それより味はどうだ？」

「す、ぐ美味しいよ！ ほんとに優理はなんでも出来そうだよね」と、博士。

「九十九さん、す、ぐ美味しいです！ …… たまに家に来て作ってもらつちゃダメですか……？」

「うううマナ。九十九君に無茶を言つんじゃないよ。それにしても、このカレーは九十九君が作ったのか？ ほんとにうまいなあ

続いてマナちゃんが口を開き、正明さんがそれを咎める。

「俺でよければいつでも来ますよ？ または非呼んでください」

マナちゃんが嬉しそうに、わい と声をあげ、しばらく四人で談笑を楽しむ。

かちやかちやと、スプーンと皿が触れあう音を聞きながら、俺はまだ両親が生きていた頃を思い出しながら、食事を楽しんだ。

九澄家での一時（後書き）

首がまがらないので、必死に書きました。

誤字脱字が恐いよう（（（（；。）））ガクガクブルブル

バーべキュー1（前書き）

今回はかなり短め。
。。。

バーべキュー

朝。チュンチュンと雀のさえずりが聞こえる。

今日は日曜日で、学校は休みだ。

にも関わらず、俺は早起きして、出かける準備をしていた。なぜかと問われれば、それは昨日の放課後に遡らなければならぬだろう

（土曜日の放課後）

「ねえねえ、ユウくんは明日暇？」

放課後、いつものように、俺、博士、かなめちゃん、五十鈴の四人で姫中に遊びに来ていた。

お腹も減ってきていたので、近くの喫茶店に入り、休憩していた矢先に、五十鈴が予定を聞いてきた。

「んー？ 暇だけど、どしたの？」

「明日みんなで、バーべキューするんだあ よかつたら、ユウくんもどうかな？ って思つて！」

「優理もおいでよー マナも誘うし、みんなで行つた方が楽しいと思つよ？」

「そうですねえ、優理くんもいた方が、いろいろと楽しめますし。

ふふふ

博士の言ふに分はわかるけど、かなめちゃん、何を樂しむ氣ですか
……？含み笑いがものすく怖いんですけど……。

「まあまあ暇だし、全然いいけど」

「じゃあ決まりー 明日の朝に迎えに行くね 寝坊しちゃダメだ
よ？ ノウくんー！」

「庄じとナー 新しくなった俺の田覚ましに死角はないー！」

とまあ、こんなわけで、俺は休みの日にも関わらず、早
起きして準備中、というわけだ。

「うーし、じのへりいで充分だろー！」

少し大きめのリュックに、食材等々を無理矢理詰め込んだため、
かなりばんばんだ。

もうじき迎えに来る時間なので、俺は急いで玄関を出た。

「やうそろ来てもいい頃だよなー？」

家の前で、キヨロキヨロしながら待っていると、一台の車が田の
前に止まった。

「やつまお ノウくんお待たせー わ、乗つて乗つてー！」

後部座席の窓を開けて、五十鈴が手招きをする。

「おせよ、五十鈴。えりど、一誠さん……でしたつけ？ 今日せよ
いじくお願ひしまや」

もうすでに、俺以外のメンバーは揃っていた。博士は助手席、その後ろに並んで五十鈴とマナちゃん。最後尾にかなめちゃんが座つており、口々におはようと声をかけてくる。俺はみんなに挨拶を返したあと、運転席に座る、優しそうな雰囲気の青年に声をかけ、かなめちゃんの横に乗り込む。

「君が優理君だね？」五十鈴から話は聞いてるよ。うん、たしかに爽やかな好青年だね。人気がある理由がわかるよ」

この人は、摘要一誠さん。五十鈴の兄にあたる。落ち着きがありて、物腰の柔らかそうな、紛う事なきイケメンである。なんでも、一誠さんファンクラブまであるそうなので、相当な人気だ。

「こんな常識のありそうな人が、五十鈴のお兄さんなんて……」

「ノーブル・ヒーロー」

俺の言葉に、反論の声をあげる五十鈴。

「優理くん。一誠さんは、一見普通ですが、よくよく見ていれば、すずちゃんのお兄さんだってわかりますよ?」

「かなちゃんまでっ！？」

五十鈴はがっくりと頃垂れ、ボクつて一体……と、いじけモードに入ってしまった。隣のマナちゃんが必死に慰めている。

……悪こねえ、五十鈴の」とはマナちゃんが言わ。

「おや？ そのまご方だと、まるで俺が五十鈴と回じで、普通じやなこつて言つてゐるやつに聞いとるよ？」

「あら？ 一誠さん、御自覚がなかつたんですか？」

かなめちゃんの葉に、これは手厳しいと苦笑する一誠さん。
つて言つた、かなめちゃん？ 朝から全開じやないですか…。
…。

「優理くん、何か……？」

「い、いや、かなめちゃんは今日も可愛いなあと想つて。あは、
あははは……」

「あつがといれこます。でも、褒めて何も出ませんよ~。」

ふふふと笑うかなめちゃん。

……田がまつたく笑つてないのが、めずらしく怖い。

「お、お兄ちゃん。これ……」

「ば、ばかー。喋る感じない、マナー。今会話に参加したら、火傷どこいじやすまなくなるー。」

「ソソ」と、小声で話す九澄兄妹。

博士、てめえ……。あとで覚えてるよ……。？」

しばりべると五十鈴も立ち直り、六人で談笑しながら、目的地

を田指す。

「つてか、バーべキューって何処でするんだ？」

そういえば田地で思い出したが、バーべキューをするとしか聞いていなかつた俺は、場所はどこなのかと疑問の声をかける。

「五十鈴、優理君に言つてなかつたのかい？」

「あはは、忘れてた。『めんおに』」

「謝るのは俺じゃなくて優理君に、だろ？」

一誠さんに言われ、それもせつかと、五十鈴は俺に謝罪をする。

「まあ別に謝るほどの事でもないんだけどな……？ それより、結局何処なのさ？」

「こつもボクたち家族がバーべキューしに行つててる河原があるんだ
よ。」

「すげえ綺麗な所だから、皆氣に入つてくれると思うよ。」

五十鈴の言葉に補足するよう、一誠さんが声を重ねる。

「なんだかんだ言つてゐるつて、もう着こなひつたけどな？ もう、
『いいだよ』

そう言って、一誠さんは車を止めた。

車を降りた俺は、その光景に息を飲んだ。

バーべキュー1（後書き）

ま、まだ事件すり起じていない……。
早く書かなきゃ……。

バーべキュー2（前書き）

まだまだ先は長い……

バーべキュー2

見渡す限りの緑の木々。その中に、太陽の光を反射し、キラキラと輝く清流。幻想的と言つても過言ではない光景に、俺は感動すら覚えた。

「すげえな……」

「綺麗ですね……。言葉がでないくらい」

隣でかなめちゃんが呟く。川の反射光に照らされ、長い髪を指で耳にかけながら、眩しそうに田を細めるかなめちゃんの横顔は、この光景に負けないくらい綺麗で

「どしたの優理？ 顔赤いよ？」

「つまつまつー？」

いきなり博士に声をかけられ、思わず変な声がでる。

「な、なんだよ博士！？ いきなり声かけるなよー びっくりするだろーーー？」

「え、あ、うん。」めん……？」

「はあ……。お兄ちやん【H】氣読みなよ……」

マナちゃんは博士を見て、やれやれといった風にため息をついた。多少は「口ツ」口ツしてくる地面だが、このくらいなら車椅子のマナ

ちやんでも、難なく移動出来るだらう。

「おーい、そろそろ準備するから手伝つてー」

一誠さんには呼ばれ、俺達は車のトランクの方に移動した。
どうやら、作業ごとに班分けをするようだ。一誠さんの指示で、
かなめちやんとマナちやんが野菜の下「」しらえ、一誠さんが道具の
組み立て、薪拾い。俺と博士と五十鈴が食料調達係となつた。
……つて、食料調達……？

「はい、これ。がんばってね？ 三人とも」

そう言つて一誠さんに渡されたのは、三本の釣竿。
あー、これはあれか？魚を釣れと、そういうことなのか？

「えつと……一誠さん？ ビリして釣竿なんか……？」

「いやあ、なんだか五十鈴のやつ、昨日見た釣り番組に感化されち
やつたらしくてね？ 『食料は現地調達だあ！』なんて言い出した
もんだからや」

ちらりと横を見ると……あれ？ いねえ！？

いつの間にか、博士の手をとつて随分先に行つてしまつた五十鈴
が、ゴウゴウと早くー！ と、こちらに向かつて手を振つてゐる。

「お肉は持つてないんですか？ あれだつたら俺も多少は持つてき
てるんですけど……」

「あはは。大丈夫だよー。人数分の魚なんて、とてもじやないけど
釣れないだらうから、ちやんと持つてきてるよ」

俺が心配そうに言つたと、一誠さんは笑つて答えた。
なるほど、それなら問題なさそうだ。

「優理くん、ちょっといこですか

かなめちゃん手を引かれ、俺はどうしたのかと問う。

「お肉があること、ハカセくんには内緒にしておこしてくださーね
?」

「ん? なんで……って、そういうことか」

「ハハハ」と、裏があつそつな笑みを浮かべるかなめちゃんを見て、
ピッとかた俺は、同じようにニヤリと笑う。

「話が早くて助かります」

「了解! それじゃ、行つてくるよ」

行つてらっしゃいと声をかけてくれる三人を背に、俺は博士たち
のもとに歩き出しだ。

くつくつくつ……、覚悟しろよ博士。車の中での怨み、今こゝで晴ら
してくられるわー!

「釣れないねえ……」

五十鈴の言葉に、男一人が頷く。

一人に合流したあと、俺は沈痛な面持ちでお肉がないことを伝えた。

五十鈴は慌てふためき、博士は愕然としていた。（五十鈴が知らなかつたのは俺もびっくりしたが）

そんなこんなで、必死に釣ろうとはしているのだが……、それほど簡単に釣れるわけもなく。かれこれ三十分ほど釣糸を垂らしている最中だ。

真実を知つてゐる俺としては、最初こそほくそ笑みながら見ていたわけだが、これだけ時間がたつてくると、さすがに飽きてくる。欠伸を噛み殺しながら釣りの真似事をしてゐると、五十鈴が声を出した……というわけだ。

「あーっ！ もう無理い！ 全然釣れないよおー！」

竿を投げ出し、手足を広げて、じろんと河原に寝転がる五十鈴。

「五十鈴ちゃん、気持ちはわかるけど、釣れなきゃ」飯、野菜だけになっちゃうよ？」

「それはそりだけ……、もうボク飽きちゃったよお

博士の言葉に、不満気な顔を隠そともせずに言つ五十鈴。

「どうか、飽きたつて……。もしほんとにお肉がなければ、大惨事なんだけどな……。まあ実際は、お肉があるから、俺もこれだけ冷静でいられるんだが。

と、その時だつた。

投げ出した五十鈴の竿が、ズズと河の方に引っ張られる。

「五十鈴！ 当たりだ！ 竿を拾え！」

「え！？ え！？」

咄嗟に俺が叫ぶも、完全に寝転がっている五十鈴では、反応に遅れ、間に合わない。

五十鈴、博士、俺の並びで釣っているため、俺でも間に合わない。必然的に博士に叫ぶ。

「博士！ 五十鈴の竿を拾え！」

「つ！ わかった！」

博士は自分の竿を放り出し、五十鈴の竿に飛び付く。

「くつ……ー？ 間に……合ええええー！」

叫びながら、河に竿が落ちる寸前、間一髪で竿を手に取る博士。

「やった！？ 拾えたよ優理ー！」

「まだ氣を抜くな博士！ フックティングして合わせろー！」

「ふつ……ー？ 何それー？」

「ええい！ とりあえずおもいつきり竿を引っ張れー！」

言われるがまま、博士は竿を引っ張る。

「よしー。あとは慎重に魚を持つヒヒー。」

博士はソロソロと糸を引き、ついに魚を釣り上げた。

「ひ、釣れた……。やつたよ優理ー。」

「ああ、ちゃんと見ていたよ。みくわつた博士ー。」

「うんー。」

嬉しひき全面に出しながら、へなへなと腰が抜けたように座り込む博士。

やじへ、固睡を飲んで見守っていた五十鈴が、博士に飛び付く。「すいーかつたよーー。ハロベーーんー。」

「わーー? わよーー。五十鈴やひーーんー。」

博士の体が、五十鈴の勢いでぐりっと傾き

ぱっしゃあああんー!」

一人仲良しく、河にダイブしたのだった。

バーべキュー2（後書き）

どうでしたか？変じやないことを祈ります。 。 。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1888y/>

おおかみかくし～The story of another world～

2011年11月20日18時01分発行